

舟由良港に到る

吉村寅太郎

首も回らば蒼茫たる浪速の城

蓬窓又聴く杜鵑の聲

丹心一片人知るや否や

家郷も夢を帝京も夢を

【作者】吉村 寅太郎（一八三七～一八六三年）幕末の志士、名を重郷（しげさと）といい通称寅太郎、黄庵（こうあん）と号す。

土佐（高知）高岡郡禰原（ゆずはら）村の庄屋太平（たへい）の長男として生まれ、幼少より俊敏、郷里では習うべき師なしと城下に出て勉学、十二歳で父に代わって庄屋（名主（なぬし）・村長（むらおさ））となり大いに実績をあげたという。文久二年家を脱して京都に至り、平野国臣等と共に勤王の大義を唱え同志の決起をうながし、同志の密接な結合に奔走した。竹市半平太等と謀（はか）って回天の策を廻らし、さらに文久三年天誅組の兵を挙げ敗死する。年二十七歳。

【語釈】*由良港：淡路島の東岸にある港 *蒼 茫：青々として広いさま *浪速城：大坂城 *蓬 窓：とま

でおおった舟の窓 篷は苦（とま） 竹やかやなどを編んで舟をおおうもの *杜 鵑：ほととぎす

*丹 心：まごころ *帝 京：天子の都 ここでは京都をさす

【通釈】ふりかえってみると、大坂城も遠くかすんではつきりとは見えない。折しも、とま舟の窓で血を吐くようなほととぎすの声を聞いた。そうでなくても悲痛無念の極（きわ）みであるのに。いったい今の世の中で、だれがわが胸中の真心を知ってくれるであろうか。（とても他人にはわかるまい）今夜もこの舟の中で見る夢は、故郷のことではなく、天皇のおられる京のことなのである。